マムルーク朝の商業政策

古林清一

【要約】本稿の目的は中世におけるアラブ系イスラム教徒の商業活動が衰退していった原因の考察である。その考察の対象はアラブ系イスラム教徒の商業活動の全盛時代であったマムルーク朝時代のエジプトの通商活動である。そして、この問題をスルタンたちの商業政策とエジプトの市民層との関連という観点より考察し、十五世紀に実施された商工業の独占政策と、この政策の市民層にもたらした影響を明らかにした。

史林　五一巻六号　一九六八年一一月

はじめに

中世におけるイスラム教徒の商業活動を見ていくと、初期の中心地はイラク方面であるといえよう。しかし、十世紀頃以後、すなわち、ファーティマ朝時代以後はエジプトが中心地であるといってよい。[1] この時代以後のエジプトは西方の地中海貿易と東方のインド洋貿易との結節点となり、ことに十三世紀より十六世紀初めのマムルーク朝時代に、その商業的繁栄は頂点に達したことはよく知られている。しかし、このようなマムルーク朝の商業活動も一五一七年のオスマン・トルコによるエジプト占領によって終末を迎えることとなった。これ以後はオスマン・トルコがイスラム世界の商業活動を制することとなるのである。同時にこの十六世紀以後は、ヨーロッパ人の東洋進出により、イスラム教徒のみが東西貿易を独占した時代はもはや、過去のものとなる。いわば、このマムルーク朝時代はアラブ系イスラム教徒の商業活動の最後の繁栄期ともいうことができる。したがって、本稿では、次のような問題を考えてみたい。すなわち、中世においては、東西貿易の利益を独占して、華麗なイスラム文明の一つの経済的基盤ともなったア

ラブ系イスラム教徒の商業活動が近代初頭に衰退していったのは何故かという問題である。

この問題については、十五世紀末より十六世紀初頭にかけて行なわれたポルトガル人によるインド洋航路の発見が重視されてきた。そこで、この問題の検討から始めたい。たしかに、一五〇二年から少なくともオスマン・トルコのマムルーク朝エジプト占領時までのヴェニスとエジプトとの香料貿易の貿易量は減少の傾向を示している。[2]

さらに、この時期のエジプトの事情は Ibn Iyās の年代記によって見ることができる。彼は回暦九一二年（一五〇五／六年）の箇所で、フランク人のインド洋、ヒジャーズ近海におけるインド商人の船舶に対する妨害行為が多くなり、彼らの商品が略奪されたために、エジプトにおいては白い布、ターバン等のインドよりの織物類の供給の減少が感ぜられたと述べている。[3]時のスルタン Qānṣūh al-Ghūrī はポルトガル人に対抗するために、提督フサインをインド洋に派遣し、一五〇八年から翌年にかけて彼らと戦わせたが、ディウ沖の海戦に敗れた。[4]さらに、ヒジャーズ地方のジッダ港の周辺に防備のため城壁を築かせたのである。[5]そして、その後も一五一四年に再度のインド遠征のため艦隊を建造しなくてはならず、スエズで二〇隻の軍船を建造したが、その武装のための総費用は四〇万ディーナールの巨費に達した。[6]さらに、この直後から徴税面での収奪が激化しているのであり、前記の提督フサインはジッダ港における関税を従来の十分の一から一挙にその十倍とし、商品の価格と同額の関税率とするに至っている。[7]このような徴税面での収奪は地中海岸のダミエッタ、アレクサンドリア等の諸都市においても見られた。ことに、後者においてはそれが著しい。一五一五年に、スルタン・カーンスーフ・アル・グーリーが同市を訪れた時には、ヨーロッパ人や回教徒の大商人は姿を消し、多くの商店は閉店したままであった。これは、その地の総督や徴税役人の抑圧のためであった。彼らは従来の十分の一税（'ushr）の税率を一挙に十倍にした。そのためにヨーロッパの商人やマグリブの商人たちはアレクサンドリアに入るのを拒否した。このことがアレクサンドリアの荒廃をもたらしたとイブン・イヤースは嘆いている。[8]

これらのことから、ポルトガル人の進出による略奪行為、これに対する防備のための徴税の強化、そして、これに伴な

う商業への重圧という経過が考えられないことはない。ポルトガル人の進出がマムルーク朝エジプトの商業活動に全く影響を与えなかったとすることはできないであろう。しかしながら、このような事態が十六世紀の初頭に始めて生じてきたものかどうかは疑問であろう。イスラム教徒の眼に映じたポルトガル人の姿はイェーメンでもエジプトでも、いわば海賊としてのそれであるといえよう。[9] しかし、ヨーロッパ人によるイスラム世界に対する海賊行為はこの時期に始まるものではない。この時期に先行する十四・五世紀において、地中海岸ではカタロニア人らによるいわゆるcorsairesの活動が見られ、ことに十五世紀中葉以後は、エジプト、シリアの海岸諸都市はたえず攻撃の危険にさらされていた。[10] また、アレクサンドリアの荒廃や重税等の現象もこの十六世紀になって始めて生じた現象ではない。十五世紀のエジプトを訪れたヨーロッパ人はアレクサンドリアがかつての栄光を失なっていることに気づいている。例えば、十五世紀中頃のエジプトの事情を述べたイタリア人Pilotiは、当時のアレクサンドリアには、過去の繁栄の姿はなく、手工業も衰え、人口も減少してさびれていたことを伝えている。[11]

したがって、マムルーク朝の滅亡の直前に、イスラム世界の外側からエジプトに与えられた衝撃によって、エジプトの商業活動が突如として崩壊したとは考え難い。むしろ、マムルーク朝の商業活動の持つ内部的矛盾を考えるべきではないだろうか。この際に注意すべきは、かつてある論者の指摘したようにエジプトの中産階級の持つ脆弱さの問題であろう。[12] さらにポルトガル人の来航以前の十五世紀のエジプトの商業活動が順調に行なわれていたかどうかも考えておかなくてはならないであろう。

したがって、本稿においては、十六世紀のカタストローフに先行する時代の十四・五世紀に遡って、エジプトの商業活動の担い手であった商人層の動向を考えていきたい。そして、同時に、エジプトの商業活動を規定するもう一つの要因であったスルタン、すなわち、国家の商業政策の問題を考察し、そのような国家の商業政策と商人層との関連を考えていきたいと思う。

① B. Lewis, "The Fatimids and the Route to India", IFM, vol. XI, 1949-50, pp. 49-54.

② 十五世紀のヴェニスの香料の年間の輸入量は約一一五万ポンドであった、一五〇二年より一五〇五年にかけては、年平均一〇〇万ポンド

であり、一五〇五年以後、ヴェニスとエジプトとの紛争のため、数年間、両国の交渉はほぼ断絶した。一五〇八年以後一五一四年までの香料輸入量は以前の四分の一に減じた。

F. C. Lane, "Venetian Shipping during the Commercial Revolution", American Historical Review, vol. XXXVIII, 1933, pp. 228-29; do., "The Mediterranean Spice Trade", American Historical Review, vol. XLV, 1940, p. 581.

③ Ibn Iyās, Badā'i' al-Zuhūr fī Waqā'i' al-Duhūr, ed. by Muḥammad Muṣṭafā, vol. IV, 1960, p. 109.

④ R. B. Serjeant, The Portuguese off the South Arabian Coast, 1963, p. 15.

⑤ Ibn Iyās, Badā'i' al-Zuhūr, vol. IV, pp. 95-96, 109, 286-87.

⑥ Ibid., vol. IV, pp. 362-66.

⑦ Ibid., vol. IV, p. 359, vol. V, 1961, p. 90.

⑧ Ibid., vol. IV, pp. 423-25.

⑨ R. B. Serjeant, op. cit., pp. 30-31.

⑩ Cf. W. Heyd, Histoire du Commerce du Levant au Moyen Âge, t. II, 1885-86, pp. 474, 483, 486.

⑪ E. Piloti, L'Égypte au Commencement du Quinzième Siècle, éd. par Dopp, 1950, p. 36.

⑫ S. Labib, "al-Tujār al-Karīmiyyia wa tijāra Miṣr fi'l-'uṣūr al-wusṭā", Majalla al-jam'iyya al-miṣriyya li'l-dirāsa al-ta'rīkhiyya, 1952, pp. 50-53.

一

この国家と商人との関連の問題を考えていくと、十五世紀の二〇年代から三〇年代にかけてが、一つの転換期になっているように思われる。すなわち、十四世紀および、十五世紀の一〇年代、二〇年代にかけての時代と十五世紀の三〇年代からマムルーク朝滅亡時までの期間との間にはかなりの相違が見られる。そこで、まず、その前半の時期から考察していくこととする。

前述のごとく、エジプトの商業活動はファーティマ朝時代より隆盛に赴くのであるが、十一世紀末より十字軍時代に入る。この十字軍のエジプト、シリアの商業活動に対して与えた影響については、一時的には破壊的な結果をもたらしたものの、結局は西洋商人の来航とそれに伴なう通商関係の活発化をもたらしたと考えるべきである。[1] 十二世紀末にサラディンが登場すると、彼はアカバ方面に進出していた十字軍の勢力を駆逐して、紅海を完全にムスリムの湖とした。そして、エジプトはキリスト教徒の支配する地中海とイスラム教徒の支配する紅海との接点となり、仲継地としての地位を獲得した。[2] このサラディンの政策が次のマムルーク朝時代にもほぼ継承されることとなるのである。

十三世紀の末から十四世紀にかけては、エジプト、シリ

ア方面とヨーロッパ諸国との通商関係は不活発な時期と考えられるのが普通である。つまり、一二九一年のアッコンの陥落に対する報復措置として、教皇庁はヨーロッパ諸国とマムルーク朝との通商を禁じた。[3] さらに、モンゴル帝国の成立に伴ない、ヨーロッパ諸国とロシア、アジアの大部分がエジプトを経ることなく直接に結びつき、エジプトの通商上の地位は低下したとされる。[4] しかしながら、この教皇の禁令は必ずしも厳格には守られなかったから、その影響を過大視することはできないであろう。

しかるに、この禁令も一三六九年には名実共に撤廃された。[5] そして、十四世紀の中葉以降、モンゴル帝国の衰退と共に、ヨーロッパとモンゴル帝国との結びつきもゆるんできた。このことはエジプト等の商業的地位を高めることとなった。そして、このような有利な状勢はシリア地方においても見られた。まずジェノアによるキプロス島のファマゴスタ港獲得に伴ない、ヴェニスらはここを避けて、シリアのベイルートらの諸港に来航することとなった。さらに、キリスト教徒の国であるアルメニア王国がマムルーク朝に征服され、この地と中央アジアを結ぶルートが衰え、シリアの通商上の地位は上昇した。[6] このようにして、十四世紀の後半以後、マムルーク朝治下のエジプト、シリアがヨーロッパ諸国との貿易において繁栄することとなった。そして、この頃より、イタリア貨幣、とくにヴェニスのドゥカト貨のエジプトにおける流通が盛んとなっている。[7] このことはイタリア諸都市との交易が活発化したことを裏書きするものであろう。

今まで見てきたように、エジプトの通商活動は十字軍以後、とりわけ、十四世紀末より十五世紀初頭にかけて良好な状態にあった。では、このいわばエジプト商業史の英雄時代を担った商人たちはどのような人々であったか。この時期において、その活動がもっともよく知られているのはKārimī商人と呼ばれる商人団である。彼らは主として香料貿易に従事し、原則として、イェーメンのアデンでインド商人より香料を買い受け、これを紅海を経て、エジプトにもたらし、アレクサンドリア等の地中海岸の諸港で西洋諸国の商人たちと接触したのである。彼らの活動がいつ始まるのかについては諸説があり、定かでない。al-Qalqashandi[8] はファーティマ朝時代についてその存在を伝えている。さ

らに、ユダヤ人に関する史料であるゲニザ文書にもその存在が見出されると主張する論者もある。[9] しかし、このゲニザ文書に登場するカーリミー商人なるものは香料貿易に従事する商人というよりは、むしろ、廻船業者としての性格が強いように思われる。したがって、これらの商人をマムルーク朝時代のカーリミー商人と必ずしも直線的には結びつけにくいように思う。もう一つの説は一一八七年、つまり、サラディン時代にその存在が見出されるとするものである。[10] この時代はサラディンによって、紅海から異教徒が完全に駆逐され、紅海が完全にムスリムの湖となった時代である。したがって、この時点にムスリムの商人団としてのカーリミー商人の出現を求めるのがもっとも妥当であろう。[11]

十三世紀においては、彼らの活動はあまり、活発とはいえない。しかし、十四世紀より十五世紀の初頭にかけてが彼らの活動の黄金時代であり、大商人が輩出している。Labibの算出によれば、このカーリミー商人以前のエジプトの大商人の場合の平均資本は約三万ディーナールであったのに対して、このカーリミー商人の場合においては、その額が五〇万ディーナールに達する者も稀ではなかった。[12] さらに、十四世紀のカーリミー商人の一人である ʿAbd al-ʿAziz b. Qaiṣūr は一年間に四万ディーナールの商税を納めたこともあった。[13] この富裕なカーリミー商人たちはその富を利用して多額の貸し付けを行なっている。例えば、一三九四年にチムールがシリアに侵入しようとした時には、当時の代表的なカーリミー商人たちがスルタン Barqūq に融資を行なっている。すなわち、Burhān al-dīn al-Maḥalli, Shihāb al-dīn Aḥmad b. Musallam, Nūr al-dīn b. al-Kharrūbi の三人が一〇〇万ディルハムの貸し付けを行なっている。[14] 一三五一年にはイェーメンのラスール朝の君主がエジプトに抑留されたが、その賠償金の四〇万ディーナールをカーリミー商人から借りようとした。[15] 彼らの内部組織については不明な点が多いが、家族的な結合が強く、父子相伝であり、ギルド的な相互扶助的な結束をしていたと考えられる。[16]

では、彼らは国家とどのような関係を持っていたであろうか。彼らはカイロやダマスクス等において、政府によってある程度監視されていたことがわかる。カルカシャンディーは当時の国家の官職を取り扱っている箇所において、

naẓar al-buhār wa'l-kārimī という官職について次のような事実を伝えている。すなわち、この職の任務はカーリミー商人が香料その他の商品をイェーメンより持ってくるのを監視することであった。[17] そして、カーリミー商人がフスタートに持っていた funduq（商館）の監察もその任務としていたと考えられる。[18] さらに、シリアのダマスクスには shādd al-zakāt という役人がおりカーリミー商人の取引活動を監察することをその任務としていた。[19] このように、カーリミー商人はある程度、政府の監察をうけていたと考えられる。そして、彼らのキャラバンがナイル川東岸の砂漠地帯を通過する時には、政府の方では当時エジプトに移住していたベドウィンの活動を抑制しようとしているのであり、カーリミー商人の保護に貢献したと考えられる。[20] しかし、政府によるこの商人たちに対する統制はそれほど強いものとはいえないであろう。この商人たちの取引活動そのものは直接の統制の対象とはなっていないし、商品の価格の統制等はまだ行なわれていない。商業活動そのものは商人たちにまかされていたのである。そして、その代償としての商税を政府に納めただけである。これには zakāt と mukūs の二種があった。[21] 両者のうち、ムクースの方が高額であり、政府のこの税に対する依存も大であった。[22]

このように、両者の間に密接な関係のあったことは否定できない。しかし、カーリミー商人はあくまでも独立した商人である。政府がその商業活動の内部にまで立ち入って統制したのではない。つまり、価格の統制等にまでは立ち入っていない。単にその商業活動の利潤の中から税を徴収したにとどまるのである。要するに、十五世紀初頭までのエジプトの商業活動においては、自由貿易主義的な傾向が強いといえるのである。したがって、市民層の発展も比較的順調であったといえるであろう。この結果、一三二六年のアレクサンドリアの反乱に見られるように、市民層が政治権力の獲得を求めようとする動きさえ見られるに至ったのである。[23]

① R. al-Barawī, Ḥālāt Miṣr al-iqtiṣādiyya fi 'Ahd al-Fāṭimiyyin, 1948, pp. 241–43.
② S. Labib, al-Tujār al-Karimiyya, pp. 9–11.
③ W. Heyd, Histoire du Commerce, t. II, p. 23 ff.
④ R. Lopez, "The Trade of Medieval Europe: the South", in The Cambridge Economic History, vol. II, 1952, p. 312.

⑤ W. Heyd, Histoire du Commerce, t. II, p. 57.

⑥ Ibid., t. II, p. 456.

⑦ A. R. Gennep, "Le Ducat Vénitien en Égypte", Revue Numismatique, sér. IV, t. I, 1897, p. 377 ff.

⑧ al-Qalqashandī, al-Ṣuhḥ al-A'shā', vol. III, 1963, p. 520.
彼はアターベイマ朝政府は紅海西岸のアイザーブ港、サワーキン港にカーリミー商人を港賦より守るために憲隊を保有していたと述べている。

⑨ S. D. Goitein, "New Light on the Beginning of the Karim Merchants", JESHO, vol. I, 1958, pp. 175–184.

⑩ W. J. Fischel, "The Spice Trade in Mamluk Egyht", JESHO, vol. I, 1958, p. 60.

⑪ アターベイマ朝よりアイユーブ朝時代にかけては、紅海、インド洋方面では、ユダヤ人商人の活動が活発であり、ゲニザ文書にその活動を見ることができる。しかし、彼らの活動もほぼ一の頃に終っている。
S. D. Goitein, "Letters and Documents on the India Trade in Medieval Times", IC, vol. 27, 1963, pp. 188–205.

⑫ S. Labīb, Handelsgeschichte Ägyptens im Spätmittelalter, 1965, S. 86.

⑬ G. Wiet, "Les Marchands d'Épices sous les Sultans Mamlouks", Cahiers d'Histoire Égyptienne, t. VII, 1955, p. 108.

⑭ Ta'rīkh Ibn al-Furāt, vol. IX, part. II, 1938, p. 379. Ibn Taghrī Birdī, al-Nujūm al-Zāhira fī Mulūk Miṣr wa'l-Qāhira, vol. 12, 1963, p. 55.

⑮ Ibn Taghrī Birdī, al-Nujūm al-Zāhira, vol. 10, p. 228–30.

⑯ W. J. Fischel, The Spice Trade, p. 165.

⑰ al-Qalqashandī, Ṣubḥ, vol. IV, p. 32.

⑱ W. J. Fischel, "Über die Gruppe der Kārimī-Kaufleute", Analecta Orientalia, XIV, 1937, S. 78.
カルカシャンディーより少し後の時代の人である al-Ẓāhirī の時代にはリの funduq は dīwān al-khāṣṣ という官庁の管理下にあり、リリに税を納めていた。
al-Ẓāhirī, Zubda Kashf al-Mamālik, éd. par P. Ravaisse, 1894, p. 108.

⑲ al-Qalqashandī, Ṣubḥ, vol. IV, p. 187.

⑳ S. Labīb, Handelsgeschichte, S. 168.

㉑ al-Qalqashandī, Ṣubḥ, vol. III, pp. 457, 464–66.

㉒ Cf. S. Labīb, al-Tujjār al-Kārimiyyia, pp. 36–37.
W. J. Fischel, Über die Gruppe der Kārimī-Kaufleute, S. 79.

㉓ S. Labīb, Handelsgeschichte, SS. 229–32. Ibn Baṭṭūṭa, Voyages, éd. et tr. par Defrémery et Sanguinetti, t. I, 1853–58, pp. 45–59.

II

しかしながら、このようないわば、自由貿易主義的な商業政策と市民層の健全な発展という経過はマムルーク朝の最後まで貫徹されなかったのである。十五世紀の二・三〇年代以後、このような商業政策は大きな変革を蒙ることとなったのである。すなわち、国家による商業の独占政策が開始されることとなったのである。古来、エジプトにおい

ては、エメラルド、ミョウバン、炭酸ソーダ（naṭrūn）等の鉱物資源[1]、木材、鉄等の戦略物資については政府の専売政策が行なわれたことは事実である。しかし、十五世紀の独占制は従来のものよりもはるかに強固で大規模なものである。

まず、このような新事態を生むに至った事情について説明を加えておかなくてはならない。この十五世紀という時代はエジプト史上他に例を見ない経済危機の時代であることに注目しなくてはならない。そして、財政的次元で破綻が生じざるをえなかった。ことに、スルタンに直属するマムルーク軍（al-mamālik al-sulṭāniyya）の保持に苦慮しなくてはならなかったのである。十五世紀においては、彼らはスルタン権力の最大の支柱であったが、毎月、スルタンより俸給（jāmakiyya）その他を受けた[2]。この俸給の額が十五世紀には激増しており、一四一〇年代から一四六〇年代までの間に、約四倍になっている[3]。このような軍費の増大は、恐らく、物価騰貴によるものであろう。兵員数は約五〇〇〇人で、十五世紀を通じてあまり変化はない[4]。それに対して、十四世紀末までは、エジプトの物価は概して安定していたが、十五世紀の前半期に、かなりのインフレーションがあったことが知られている。農業生産物価格も騰貴したが、とりわけ、手工業生産物の価格の上昇が顕著であった[5]。

このような軍費の増大に比し、この支払いを担当した官庁である diwān al-mufrad の長官である ustādār（宮宰）たちは苦境に立たされ、例えば、一四二一年より一四三四年の間に一四人のウスターダールが交代したが、そのうち、八人はこれらの支払いを十分に行なうことができなかったために責任を問われて解任されたのである[6]。

al-Ẓāhirī はかつて、この官庁の収入は年間に四〇万ディーナールの現金収入と小麦、そら豆、大麦の現物収入三〇万アルデブに達したと述べている[7]。しかし、このような収入も減少の傾向を示し、一四二九年一月にこの官庁の会計調査が行なわれた時には、六万ディーナールの赤字を出すに至っている[8]。今まで見てきたような財政不安は、結局は、正確なデータはないが、農業収入の減収より来るのであろう[9]。この際、とくに考えるべきは、十五世紀のエジプトを約一四年に一回の割合で襲った疫病による人口の激減、さらには、イクター制の進展による中央政府の財政収

入の減少の問題であろう。[10]

このようにして、軍事費が増大していくのに対して、他方では農業収入がそれを十分にまかないえなかったのであるが、それを補うためには残された分野としては商工業の分野しかなかったのである。この商工業の独占制という点で注目されるべきはスルタンBarsbāy（一四二二年—三八年）の時代である。したがって、この時代の考察に力点を置きたい。そして、一応、問題を国内商業に関するものと対外貿易に関するものとの二つに分け、まず、前者より検討していくこととしたい。

最初に、このスルタンが行なったのは砂糖の独占政策であった。一四二三年に、スルタンは勅令を出して個人経営の精糖所の閉鎖を命じ、そして、スルタンの精糖所のみの営業を認め、砂糖を扱う商人と砂糖菓子製造業者はスルタンの倉庫からのみ買い、売るべきであるとされた。[11] しかし、この勅令は翌年には撤回された。そして一四二七年には、もっと撤底した形で再開された。この時のものは従来のような砂糖の販売、精糖面での規制からさらにすすんで、その生産面をも規制しようとするものであった。この際、スルタンの直轄領以外での砂糖きびの栽培を禁止し、シロップ、菓子、砂糖はスルタン領での砂糖きびからのみ作られなくてはならないことが命ぜられたのである。[12] しかし、この独占政策も数回の改廃を経た後に一四三三年に最終的に廃止された。[13] さらに、彼は穀物取引の独占をも試みている。一四二九年に、スルタンは売るべき穀物はすべてスルタンの穀物庫に持ってくることを命じた。この買い占めにより、翌年は凶作であったために、これを放出して三万ディーナールの利益を得た。[14] それのみならず、そら豆、肉、織物、蜂蜜、米、バター、薪等についても独占政策を試みるに至っている。[15]

今まで見てきたような政策は、当時の言葉では tarḥ あるいは rimāya と呼ばれるが、恣意的な価格で、すなわち、市場価格よりは不当に高い価格で商品を商人ないし、一般の住民に売りつけることである。この強制販売の政策はマムルーク朝の初期から行なわれており、もっとも早いのは一二八九年にダマスクスで一人のアミールによって、木材、砂糖その他の強制販売が企図された事件である。[16] この政策は十四世紀にも行なわれたが、大々的な形で実施されたのは、やはり、十五世紀においてであり、とくに、スルタン・

バルスバーイの治世においてである。今までに述べた砂糖、穀物等に対する政策はその一環に他ならない。この強制販売の政策が、このスルタン以後、どのような形で実施されていったかを見ていくと、若干の例外をのぞき、スルタンによる実施は稀である。十五世紀の後半期ともなるとその実施者は殆んどがアミールである。そして、それにつれて、強制販売の性格も変化してきた。それまではその対象となったのは商人たちであったが、十五世紀の後半以後は都市の住民すべてがその強制販売の対象となっている。[17] つまり、スルタン・バルスバーイの国内商業に対する統制の試みは必ずしも、後のスルタンたちには継承されていないのである。その理由として考えなくてはならないのはアミールの持っていた経済力の問題である。都市の穀物市場への穀物の供給は彼らの制するところであった。[18] さらに、砂糖工業の場合も、彼らは砂糖工場を自ら経営するか、その保護者となっていたのである。[19]

要するに、スルタン・バルスバーイはアミールに代って、スルタン自身が砂糖工業、穀物取引等の利益を得ようとしたのである。したがって、この世紀の後半にアミール権力が強化されると共に、バルスバーイの政策が後のスルタンたちにあまり継承されることなく、失敗に終ったのも当然であったといえる。

① al-Qalqashandi, Ṣubḥ, vol. III, pp. 455-57.

② D. Ayalon, "The System of Payment in Mamluk Military Society", JESHO, vol. I, 1957-58, pp. 48-49.

③ スルタン Mu'ayyad Shaikh（一四一二年—二一年）の治世には一ヵ月の出費は一万一千ディーナールであったが、一四二一年には二万一千ディーナール、一四二五年には三万ディーナール、一四六五年には四万ディーナールに、一四六八年には四万六千ディーナール以上になった。
D. Ayalon, op. cit., pp. 276-77.

④ D. Ayalon, "Studies on the Structure of the Mamluk Army", I, BSOAS, vol. XV, 1953, pp. 225-26.

⑤ 小麦、肉の価格が二〇%、パンが三六%上昇した。さらに、砂糖が三〇〇%、蜂蜜が一〇〇%、石けんが五〇〇%上昇した。
E. Ashtor-Strauss, "Prix et Salaires à l'Époque Mamlouke", REI, t. XV, 1949, pp. 49-94.
do., "L'Évolution des Prix dans le Proche-Orient à la Basse-Époque", JESHO, vol. IV, 1961, pp. 15-46.

⑥ A. Darrag, L'Égypte sous le Règne de Barsbay, 1961, pp. 42-50.

⑦ al-Ẓāhirī, Zubda, p. 107.

⑧ M. Sobernheim, "Das Zuckermonopol unter Sultan Barsbāi", Zeitschift für Assyriologie und Verwandte Gebiete, Bd. XXVII, 1912, S. 83.

⑨ 十五世紀に関する地租の見込み額（ibra）の総計は不明であるが、恐らく減少しているであろう。十三世紀、十四世紀、十六世紀に関するものは次のとおりである。

1298年, 10,816,584 Dinār
1315年, 9,428,289 Dinār
1520年(頃), 1,800,000 Dinār

E. Ashtor-Strauss, Prix et Salaires, p. 50.

⑩ D. Neustadt, "The Plague and its Effects upon the Mamluk Army", JRAS, 1946, pp. 67-73.
L. A. Semenova, "Osnovnuie napravleniya razvitiya feodal'nogo zemleviadeniya v Egipte XV veka", SV, 1958, p. 87 ff.

⑪ M. Sobernheim, op. cit., S. 76.

⑫ Ibid., S. 77.

⑬ Ibid., S. 78.

⑭ al-Ẓāhiri, Zubda, pp. 122-23.

⑮ A. Darrag, Barsbay, pp. 152-57.

⑯ Ta'rīkh Ibn al-Furāt, vol. VIII, 1939, pp. 81-82.

⑰ I. R. Lapidus, Muslim Cities in the Later Middle Ages, 1967, pp. 55, 57.

⑱ Ibid., p. 51.

⑲ Ibn Duqmāq, al-Intiṣār li-Wāsiṭat 'Iqd al-Amṣār, vol. IV, 1309AH, pp. 41-46.

三

では、この国内商業の分野に対して、対外貿易の分野に対する独占政策はどのようにして行なわれたであろうか。この分野には、元来、アミールの力はあまり、及んでいなかったし、前述のごとく、十五世紀の初頭においては、エジプトの対外貿易はその繁栄の絶頂期にあった。これこそ、スルタン・バルスバーイの独占政策の絶好の対象となったのである。

まず、彼はヒジャーズ地方への進出を行なった。このメッカ、メディナの両聖都を含む地方は名目的には、カイロのスルタンに従属しながら、事実上はメッカの sharif の支配下にあった。そして、この地方は十五世紀の初頭に紅海周辺の通商ルートの変化が生じたことにより、その経済的重要性を増しつつあった。すなわち、これまで、インド洋貿易の最大の仲継基地はイェーメンのアデンであった。この港でカーリミー商人たちはインド商人より商品を買い受け、紅海西岸の 'Aidhab, Quṣair らの諸港に入港した。これらの諸港より砂漠地帯を横断して、Qūṣ の町に出て、ここよりナイル川を下って、カイロの町へ出たのである。①これより以前のファーティマ朝末期よりアイユーブ朝時代にかけてインド洋貿易に活躍したいわゆるゲニザ文書に登場するユダヤ人商人もこのルートを利用したのである。②

しかるに、十五世紀初頭に、アデンのラスール朝の当時の君主がインド船に対する圧迫を強め、課税率を五〇％にまで高め、それのみならず、アデンの住民によるキャラバンまで編成して、仲継貿易まで行なおうとした。[3] このために、インド船がアデンを避けて、ヒジャーズのジッダ港に来航するようになったのである。[4] これ以後、インド船はジッダに直行し、ここから、その商品はメッカを経て、キャラバンでカイロへ向うか、海上をシナイ半島の Tūr 港まで行き、ここよりカイロへ向うかの二通りのルートによって輸送された。[5]

このジッダ港の支配をスルタン・バルスバーイはめざしたのである。彼は一四二三年と二五年の二度にわたってヒジャーズ地方に遠征軍を派遣し、シャリーフの Ḥasan を屈伏させた。[6] そして、ジッダ港に来航するインド船からの関税の徴収権を掌中に収めた。このことは一四二五年にジッダへ徴税官として Sa'd al-dīn Ibrāhīm が派遣されたことからもわかる。その後も引きつづき、徴税官が派遣された。[7] そして、一四二六年にはシャリーフの Barakāt にジッダにおけるインド船への課税権を放棄させた。[8] そのために、年間七万ディーナールの関税収入を得ている。翌年には五万ディーナールを得ている。[9]

このようにして、バルスバーイは紅海沿岸における最大の貿易港であったジッダ港を掌中に収めると、その地位を確固たるものとするために種々の政策をとった。すなわち、旧ルートの諸港に対して圧迫を加えた。紅海西岸のアイザーブ港を破壊し、サワーキン港にも圧迫を加えた。[10] さらに、アデンより来る商品に不当に高い関税を課した。エジプト、シリアの住民によってもたらされたならば税率を二倍にして二〇％の税を課し、アデンの商人によってもたらされた場合には商品を没収した。[11] つまり、スルタン・バルスバーイはヒジャーズ地方のジッダ港を支配することによって、インドよりの商品がイスラム世界に入ってくる入口を制することに成功し、その商品の供給路は彼の支配下に置かれることとなったのである。カイロのスルタンによるジッダ港の支配は彼以後も継承され、マムルーク朝滅亡時まで維持された。

この基礎の上に、一四二六年にスルタンは巡礼、シリア商人に対して、メッカからシリアへ直行することを禁じ、

必ずカイロを通過せしめることとした。これはカイロで課税するのが目的であった。[12] このようにして、シリア商人を抑圧して、香料貿易におけるエジプトの優位を確立しようとしたのである。そして、遂に、一四二九年には胡椒の取引をスルタンの独占とした。つまり、ジッダより来る胡椒はスルタンからのみ、ヨーロッパ人に売られることとしたのである。[13] この際にはジッダに資金を送って、ここで胡椒を買い占めさせている。スルタンの取引が終るまでは、他の商人たちは取引を禁ぜられている。同時に、スルタンの領土のすべての商人はカイロを通過すること、さらに、ヨーロッパ人との貿易はアレクサンドリア一港に限ることを命じた。[14]

この香料貿易の独占制の実施により、アレクサンドリア港におけるヨーロッパの商人たちとの取引の面では大きな変革が行なわれた。従来、この港では自由競争が行なわれており、前述のカーリミー商人を中心とするようなエジプトの商人たちと政府の出先機関がヨーロッパ商人たちと競争して取引を行なっていたのである。しかるに、スルタンは、ヨーロッパの商人に対する香料の唯一の供給者となり、この際に、香料の価格の決定権を掌中に収めた。この時に、彼は胡椒1.himl の価格をカイロで一二〇ディーナール、アレクサンドリアで一三〇ディーナールに定めた。この時の市場価格はカイロで五〇ディーナール、アレクサンドリアで八〇ディーナールであった。[15] さらに、インドの原産地での価格は約二ディーナール、メッカでは一〇ディーナール程度であったから、かなりの収奪である。[16]

今まで見てきたようなヨーロッパの商人に対する独占制の実施は彼等の反撥をかうこととなり、ヴェニス、ジェノアらのイタリア諸都市、アラゴンらの西洋諸国との間に紛争が生ずることとなった。これらの諸国は当然のことながら、独占制の実施に反対し、その撤廃を求めた。例えば、ヴェニスはこの措置に抗議し、スルタンの定めた価格での取引を拒否した。一四三一年には、スルタンは屈伏して、ヴェニスに対する苛斂誅求をやめ、古来の特権を再確認した。[17] しかし、スルタンは自己の政策を完全に改めたのではない。一四三二年から三六年までこの政策は繰り返して行なわれた。[18] ジェノアとエジプトとの間にも、一四二九年にアレクサンドリアのジェノア人逃亡事件が起り、三五年と翌年には、ヴェニスと同じように、胡椒の恣意的価格での

買付けを強制され、その紛争の結束、スルタン領より追放の処置を受けている。[19]

次に海賊活動で知られるカタロニア人の本国でもあったアラゴンとエジプトとの関係を考察することとする。両者は一四三〇年に通商条約を結び、スルタンは恣意的な課税や強制的な販売をしないことを約した。しかし、二年後にはアラゴンの商人たちが多量にエジプトにもたらしていた銅とサンゴの買付け価格を恣意的にスルタンが定めたために、両国の間に紛争が生じている。[20] カタロニアの商人たちはスルタンの倉庫より商品を買うことを拒否したが、スルタンから満足な解答は得られなかった。[21] これを契機として、一時停止していたカタロニア人の海賊活動は再び活発化し、シリア、エジプトの海岸都市に対する略奪は激化した。[22]

このように、スルタンの独占制の実施に対して西洋諸国は取引拒否や海賊活動をもって対応したために、必ずしもスルタンの意志は貫徹されなかったのである。しかしながら、国内商業に対する独占政策が一時的なものに終ったのに対して、対外貿易に対するそれはかなり永続的な結果をもたらした。つまり、バルスバーイ以後のスルタンたちもほぼこの政策を継承しているのである。例えば、一四七三年にスルタン Qā'itbāy（一四六八年—九五年）はヴェニスのドージェにあてた返書の中で、胡椒貿易の唯一の実施者としての自己を主張している。[23] さらに、スルタンによる香料貿易の実施は次のような例からもわかる。スルタン Ināl（一四五三年死）は胡椒の価格を一ヒムルにつき一〇〇ドゥカトとした。[24] スルタン Mu'ayyad Aḥmad（一四五三年—六〇年）はその父イーナールの定めた価格をヴェニスの要求により八五ドゥカトにした。スルタン・カーイトバーイは一四八〇年には胡椒の価格として一一〇ドゥカトを要求した。十六世紀に入ると、スルタン・カーンスーフ・アル・グーリーは一五〇二年に香料貿易をエジプトに集中させようとして、シリアの諸港を圧迫した。翌年には胡椒の価格を一〇五ドゥカトとした。一五〇四年より翌年にかけては一九二ドゥカトを要求するに至った。[25]

つまり、マムルーク朝の滅亡時まで、香料貿易のスルタンによる独占とそれに伴なう恣意的価格による販売というバルスバーイの創始した商業政策は継承されているのである。

では、この政策はどのような影響をエジプトの商業活動に与えたのであろうか。まず、対西欧通商関係では、バルスバーイ時代に両者の間に紛争の生じたことはすでに触れたとおりである。このような西洋諸国のエジプトの独占制度に対する反撥はそれ以後の時代において見られる。例えば、一五一二年にエジプトを訪れたヴェニスの使節 Domenico Trevisani はヴェニスの船が当時エジプトに来航するのが少なくなったのは、一つには、エジプトに商業の自由がないからであると述べ、独占制に抗議している。[26] ポルトガル人のインド洋航路発見直後のこの時期において、ひとしく危機的状況に置かれていたエジプトとヴェニスとの同盟が要請され、共通の敵、ポルトガルとオスマン・トルコに対抗する必要が感ぜられていたこの時に、両者の提携に対して阻止的に作用したのはこの独占制である。いわば、エジプトの独占制の維持は対西欧通商関係の発展に対しても好ましからざる影響を及ぼしたのである。このことは十五世紀末から十六世紀の初頭にかけて、オスマン・トルコの諸港、とりわけ、ブルサのめざましい発展[27]と対比すると、エジプトの通商活動にとってゆゆしい結果をもたらしたと考えなくてはならない。

① al-Qalqashandī, Ṣubḥ, vol. III, pp. 464-66.
② S. D. Goitein, "From the Mediterranean to India, Documents on the Trade to India, South Arabia and East Africa from the Eleventh to Twelfth Centuries", Speculum, vol. 29, 1954, pp. 129-93.
③ Piloti, op. cit., p. 42.
④ W. Heyd, Histoire du Commerce, t. II, p. 445.
⑤ Ibid., t. II, p. 446.
Piloti, op. cit., pp. 45-46.
⑥ A. Darrag, Barsbay, pp. 166-69.
⑦ Ibn Taghri Birdi, History of Egypt (1382-1469), tr. by W. Popper, part. IV, 1958, p. 21.
⑧ Ibid., p. 41.
⑨ G. Wiet, op. cit., p. 99.
なお、ザーヒリーははっきりした年代を挙げていないが、当時一年間に一〇〇隻のインド船がジッダに入港し、税収入は年間二〇万ディーナールに達すると述べているが、これは誇張されていると考えられる。Zubda, p. 14.
⑩ Y. F. Ḥasan, The Arabs and the Sudan from the Seventh to the Early Sixteenth Century, 1967, pp. 81-89.
⑪ W. Heyd, Histoire du Commerce, t. II, p. 446.
G. Wiet, op. cit., pp. 99-100.
⑫ G. Wiet, op. cit., p. 98.
⑬ Ibid., p. 102.
⑭ S. Labib, Handelsgeschichte, SS. 382-83.

⑮ S. Labib, al-Tujjār al-Karīmiyyīa, p. 45; A. Darrag, Barsbāy, p. 304.
⑯ S. Labib, Handelsgeschichte, S. 397.
⑰ W. Heyd, Histoire du Commerce, t. II, p. 476.
⑱ A. Darrag, Barsbay, p. 306.
⑲ Ibid., pp. 316-18.
⑳ S. Labib, Handelsgeschichte, SS. 356-57.
㉑ 'Alī Tarkhān, Miṣr fī 'Aṣr Dawlat al-Mamālik al-Jarākisa, 1960, p. 289.
㉒ A. Darrag, Barsbay, pp. 344-46.
㉓ J. Wansbrough, "A Mamluk Letter of 877/1473", BSOAS, vol. 24, 1961, p. 206.
㉔ A. Darrag, Barsbay, pp. 359-60.
㉕ W. Heyd, Histoire du Commerce, t. II, pp. 492-93.
㉖ M. Reinaud, "Traités de Commerce entre la République de Venise et les Derniers Sultans Mamelouks d'Égypte", JA, sér. I, t. IV, 1829, pp. 29-31.
㉗ Cf. H. Inalcik, "Bursa and the Commerce of the Levant", JESHO, vol. III, 1960, pp. 131-47.

四

しかしながら、この独占制のエジプトの商人層にもたらした結果はより決定的なものであり、独占制のもたらした最大の影響はこの点に見ることができる。以下、この点に焦点を絞っていくこととしたい。

これまで、エジプトにおいて、香料貿易に従事してきた商人たちはカーリミー商人と呼ばれる商人団であったことはすでに述べたとうりである。しかるにこの商人たちもスルタンの独占制の影響を受けることとなったのである。すなわち、バルスバーイは、カーリミー商人のようなエジプトの商人とヨーロッパの商人との直接接触を禁じたのである。この場合、スルタンの倉庫のみが胡椒の貯蔵、取引に従事することが出来たのである。[1] このようにして、スルタンは胡椒の取引の独占、市場の統制を企画したのであるが、この結果、当然のことながら、カーリミー商人の駆逐をもたらすこととなった。すなわち、一四三二年にはカーリミー商人に対して、スルタンの許可なしに香料を売るのを禁じ、さらに、彼らを集めて、胡椒一ヒムルにつき八〇ディーナールの価格で強制的に売りつけた。[2] 一四三五年には、前述のように、アデンよりジッダに来るエジプト、シリアの商人に対する関税をインド商人の二倍にしているが、このエジプト商人は具体的にはカーリミー商人をさしていると考えられる。このようにして、スルタンより圧迫を加えられたカーリミー商人は解体への道をたどることとなるの

である。最後のカーリミー商人と言われているのは Badr al-dīn b. ʻUlaiba（一四八四年死）である。[3] しかし、十五世紀の中頃にはほぼその活動をやめていたと考えられる。[4]

香料貿易の分野から駆逐されたカーリミー商人たちは次のように変質していった。まず第一に、スルタンに仕えて行政職につき、ジッダ等で徴税官等の職についた。第二に、従来のカーリミー商人はイェーメンのアデンまで行くのを原則としていたのに対して、遠くインドのカリカット、カンベイ等まで行く者が出てきた。いわば、インド逃亡である。第三に、今までの香料貿易の分野から転向して、貨幣取引、ことに銅貨の取引に従事する者も出てきた。[5]

では、このカーリミー商人の解体後、エジプトの通商活動の上にどのような事態が生じてきたのであろうか。この点を考えていきたい。スルタンが直接に貿易に従事するようになったのであるが、まず、具体的にはどのような形で実施されたかを明らかにしなくてはならない。史料不足のため詳細な点は明らかにしえないが、今までに明らかになった点を述べてみれば、次のようになろう。エジプトにおいてはマムルーク朝以前から政府の商業担当機関が存在したことは事実である。この機関は matjar の名で知られる。C. Cahen の研究によれば、ファーティマ朝末ないしアイユーブ朝初めの状態を示していると考えられる al-Makhzūmi の税制書にその存在が示されている。このマトジャルはヨーロッパからの鉄、木材、松脂等の戦略物資を独占的に購入するための機関であった。ここで購入されたそれらの戦略物資は海軍工廠にはこばれて、軍艦、武器の建造に供されたのである。[6] さらに、同時代には、このマトジャルはミョウバンの独占を行なっていたことが知られる。すなわち、上エジプトのオアシスで採取されたミョウバンはアレクサンドリアにはこばれ、その地のマトジャルがその販売を独占していた。このミョウバンの大部分は輸出された。[7] そして、このマトジャルはその購入物資の決済のためにその三分の一は貨幣で支払い、残りの三分の二はミョウバンで支払ったのである。[8] つまり、アイユーブ朝期においては、マトジャルは戦略物資、ミョウバン等の取引に携わっていたのである。しかしながら、インド洋貿易にまでは従事していない。マムルーク朝時代に入ると、このマトジャルの役割は一層大きなものとなった。そして、こ

の時代には nāẓir al-khāṣṣ（直轄領担当長官）の監督下に置かれた。[9] それのみならず強制販売（ṭarḥ, rimāya）の実施も行なっている。例えば、一三三七年にはヨーロッパからの輸入品であったタールを油商人に強制的に販売した。さらに、砂糖、氷砂糖、蜂蜜、布、木材等をマトジャルより売りつけている。[10] このように、マムルーク朝時代のマトジャルは従来と同じく、ヨーロッパからの戦略物資の輸入に従事しつつも、一方では商人たちに対する強制販売をも行なっていたことがわかる。そして、バルスバーイ時代にもその存在が知られる。一四二九年に砂糖の独占が行なわれた時に、それに関与したのはこのマトジャルである。[11] Lapidus はこのマトジャルが独占時代の商業担当機関であったとし、カイロとアレクサンドリアにこの機関が設置され、香料貿易にも従事するようになったとしている。[12]

しかしながら、イタリア諸都市との間で締結された通商条約においては dacchieri の名で登場する商業担当機関の存在が知られる。そして、ヨーロッパ人への胡椒の販売、その価格の決定、彼らのもたらした金銀の独占的購入に従事したことが示されている。[13] この言葉はアラビア語の dhakhira という語にあたると考えられる。[14] この語はシナイ山の修道院の文書のうち、紅海岸のトゥール港に関するものにも現れ、香料の貯蔵等に関係していたことがわかる。[15]

そして、この商業担当機関へ香料を供給したのはヒジャーズ地方のジッダに派遣された役人たちである。例えば、この地の一人の役人が一四五九年に七四〇〇タクラ、つまり、約一一〇〇トンという巨額の香料の買入れに成功している。さらに、一四五〇年には、そのジッダ港の役人の一人であった Timrāz という者がその地で徴収された三万ディーナールを横領してインドへ逃亡したことがわかる。途中で立寄った地域の商人たちはスルタンの怒りを恐れて彼と接触するのを避けたために、彼はカリカットへ行った。そして、そこでスルタンのために胡椒を買いつけ、帰国の途につかざるをえなかった。[16] 後者の場合は少し異常な場合であるが、役人が商業活動に参与していたことを示している。このような、ジッダ港を基地とする対カリカット香料貿易に対するスルタンの厳格な統制については十六世紀のポルトガル人もその事実を伝えている。[17]

では今まで述べたような事態が生ずると、エジプトの商

人層の間にどのような動向が生まれてきたのであろうか。この点を論じておきたい。以前のカーリミー商人に代って登場してきた商人たちは種々の名称で呼ばれる。つまり、tājir al-sulṭān, tājir al-khāṣṣ, kabīr al-tujjār とかの名で呼ばれている。前二者はいずれもスルタンの私的な商人を意味する。例えば、十四世紀前半期にエジプトとペルシャの間を往復した商人に al-Majd al-Sallāmī という者がいたが、彼は tājir al-khāṣṣ という商人の部類に属し、奴隷商人であった。[18] 同じ頃にも、キプチャック汗国とエジプトとの交渉に奴隷商人である tājir al-khāṣṣ が関与している。[19] つまり、これらの商人たちはスルタンの私的な商人であり、とくに奴隷貿易に関与していたのであり、マムルーク朝国家の存立の基礎をなすマムルークの購入に関係していたのである。彼らはスルタンに優遇され、免税の特権を持っていた。[20] これらの商人はスルタンとの結びつきがことに強く、その活動は政府の監察のもとにあった。これらの商人たちはスルタンの命令をうけて、エジプトとクリミア半島、コーカサス地方等のマムルークの供給地との間を往復することを主たる任務としていた。彼らは mu'allim tujjār al-mamālik（奴隷商人監督官）という役人の統制下にあった。したがって、マムルーク・レジームとの関係はことに密接であった。そして、なかには、この官職についていたアミールやその近親者が奴隷商人になることさえあった。[21] 要するに、彼らは前代のカーリミー商人よりもマムルーク・レジームとの関係が一層密接である。三番目の kabīr al-tujjār は商人中の大なる者の意味であるが、十五世紀にはこの名前で呼ばれる者が多い。例えば、砂糖の独占をバルスバーイにすすめた Nūr al-dīn Ṭunbudī という商人もこの名称で呼ばれている。[22] 彼らもスルタンとの強びつきの強い商人である。

以上の三者はカーリミー商人よりもスルタン権力との結びつきが強いわけである。彼らはともに khawājā という称号を持っている場合が多いことはラピダスの指摘したところである。[23] この言葉について、カルカシャンディーは、外国系の大商人、ことにペルシャ系の商人に対して用いられる言葉であり、元来はペルシャ語である。その意味は sayyid つまり、一種の尊称であるとしている。[24] これはトルコ語等で用いられるホジャと同じ語である。カルカシャンディーの史料はバルスバーイ以前の時代のものであるか

ら、バルスバーイ以後の時代について全面的な妥当性は持たないであろう。しかしながら、この言葉がペルシャ語起源であり、この尊称で呼ばれる商人たちが、少なくとも、その最初の段階においては、外国人として、ペルシャあるいはインド方面出身の商人であることは大いに考えられることである。[29] 例えば、このハワージャーのタイトルを持つ商人にイラクのバスラやペルシャのタブリーズの出身者が見られることは事実である。[30] 勿論、このハワージャーのタイトルを持つ商人のすべてが外国人として、史料の上には現れない。エジプト、シリア出身者と記されている場合の方が多い。しかしながら、カーリミー商人と比較すると外国系の性格が強いように思われる。このことは、このハワージャー商人とカーリミー商人との各々の活動範囲を比較してみると、前者の方がペルシャ湾、インド方面での活動が目立つことと関連しているのであろう。カーリミー商人は一部の例外を除けば、原則として、イェーメンのアデンとエジプトとの間を往復する商人である。しかるに、このハワージャーのタイトルを持つ商人たちはペルシャ湾のホルムズ、インドのカンベイ、カリカット等の諸港で活躍している。例えば、Shihāb al-dīn Aḥmad という商人はハワージャーのタイトルを持ち、ジッダにおいて港湾監督官である shāh bandar という職についた。さらに、インドへ行き、Gulbarga の地でエジプト政府の代理人として働いた。また ʿAbd al-Karīm という商人もハワージャーのタイトルを持ち、メッカを基地として、ホルムズへ貿易のために赴いた。[31] ハワージャーのタイトルを持つ商人のうちで、ことに、tājir al-khāṣṣ, tājir al-sulṭān の部類の商人には奴隷商人が多いことをすでに述べたが、彼らにも外国人が多いのである。このように考えると、外国起源の商人たちは自己の属する確固たる組織を持たず、これらの商人たちはスルタン権力と癒着する可能性がカーリミー商人たちにくらべると強かったと考えられる。これらの商人たちはしだいに香料貿易にも従事するようになり、アレクサンドリア等の諸港で活躍するようになる。イタリア側の文献では coza の名称で現れる。[32]

このハワージャーのタイトルを持つ商人たちはスルタン権力との関連が密接となり政府の商業担当機関の職員としての性格が濃厚に出てくるようになる。例えば ʿĪsā al-Qārī

という商人はアレクサンドリアで香料取引を行なう際に、スルタンより資金を受けて行なっている。[29] いわば、独立した企業家としての性格が薄れているといえるのである。さらに、この点が徹底すると、単に商人であるだけでなく、国家の役人として官職につく場合が見られる。ジッダ港等での徴税官、港湾の監督官やカーディー、書記等の職につくこととなる。例えば、十五世紀にシリアで活躍したハワージャー商人の一族に Muzalliq 家という商人の一族がある。初代の Muḥammad b. Muzalliq はダマスクスの人であり、tājir al-khāṣṣ であり、ハワージャーのタイトルを持っていた。[30] そして、スルタン・バルスバーイに仕えた。彼の子の Badr al-din Ḥasan b. Muḥammad b. Muzalliq もハワージャーのタイトルをもち、ジッダがスルタンの直接統治下に入った時に、その地で徴税官になり、スルタンのジッダ支配に奉仕している。そして、シリアにおける軍隊の監察官になっている。[31] 後者の子である Shams al-din Muḥammad b. al-Muzalliq はダマスクスのシャーフィイー派のカーディーの長ともなり、書記にもなっている。[32] つまり、この一族はスルタンの忠実な下僕としての生き方を示すこととなったのである。

この商人の官界への進出の傾向は、当時盛んに行なわれた売官制によって、一層おしすすめられた。そして、この傾向は一部の大商人に限らず、当時の市民層一般の傾向となっていることに注目しなければならない。ことに、手工業者たちの官界進出の傾向は顕著であった。例えば、銅細工師の Abū al-Khair al-Naḥḥās という者が一四四七年に財務関係の役人になっている。[33] このように、商人、手工業者が官僚化してくるが、それが徹底すると、土地所有者化するのである。十四世紀以来、マムルーク朝の軍隊のうち、非マムルーク軍である jund al-ḥalqa がイクターを失なう傾向が見られたが、その再分配には商人、手工業者が参与している。その結果、十五世紀中葉にはハルカのイクターの大部分は商工業者の掌中に帰した。[34]

では、このハワージャー商人はそれ以前の商人、ことにカーリミー商人とくらべるとどのような特徴を持っているであろうか。まず、何よりも、彼等には独立した企業家としての性格が薄れてきていることに注目しなくてはならない。カーリミー商人は、主として、徴税面でのみ国家と結

びついていたのであるが、このハワージャー商人は政府の資金を受けて、これを運用しながら、商業行為を行なう場合が多い。さらに、政府の命令をうけて、取引のため、外国へ赴く場合が多い。そして、商品の価格等は政府の定めるところである。したがって、このハワージャー商人には政府の商業担当機関との結びつきが強くなってくる。独占制の当然の結果として、スルタン権力との結合という面が強化されてくる。しかし、その保護のもとに特権商人として成長していく道も閉ざされがちであったことに注意しなくてはならない。何故ならば、十五世紀末より、十六世紀初頭にかけては政府の相つぐ商人財産の没収が行なわれている。その結果として、ハワージャー商人がある程度以上に財産を蓄えることはかなり困難であった。このことは、先に触れたダマスクスのムザッリク家のような一部の例外を除けば、ハワージャー商人の場合には世襲化する傾向があまり見られないことと関連する。しかるに、カーリミー商人の場合には、父子相伝の傾向があり、何代にもわたる家系が見られるのであり、Kharrubi家、Mahalli家、Kuwayk家のような名家が存在し、これらの名家は互いに姻戚関係によって結びついている。[35] カーリミー商人の内部組織がギルドと呼ぶに十分に価するものであったかについては疑問を持つ論者もあるが、[36] ハワージャー商人に対比すると、かなりの内部的統一性があったと考えてよい。いわば、ハワージャー商人は孤立した商人たちなのである。ハワージャーのタイトルを持つ商人たちをカーリミー商人と同じように、一つの統一的な商人団として把握することは困難である。

最後に、カーリミー商人とハワージャー商人との商人としての規模を比較してみよう。ラビーブによれば、十五世紀後半の大商人の平均利潤は約二万ディーナールであるが、十四世紀の大商人の場合には一〇〇万ディーナールに達する者もいた。[37] つまり、十五世紀の後半期を代表するハワージャー商人と十四世紀を代表するカーリミー商人との間には、その経済力において、格段の差のあることがわかる。

今まで、述べてきたような十五世紀中葉以後のエジプトの商人層の官僚化と矮少化という現象はスルタン・バルスバーイの独占政策のもたらした最大の悪影響といえるであろう。このようにして、エジプトの商人層はスルタン権力と癒着し、政府の商業独占政策に奉仕する忠実な下僕と化

していったのである。この市民層の健全な発展の阻止という現象が十五世紀のエジプトにおいては見られるわけである。この現象こそ、エジプトの商業活動を内側から崩壊させていくのに決定的意味をもったのである。

① M. Sobernheim, op. cit., p. 75.

② S. Labīb, al-Tujjār al-Kārimiyyia, p. 45.

③ Ibn Iyās, Badā'i' al-Zuhūr, vol. III, 1963, p. 207.
W. J. Fischel, The Spice Trade, p. 174.

④ S. Labīb, al-Tujjār al-Kārimiyyia, p. 49.

⑤ A. Darrag, Barsbay, pp. 235-36.

⑥ C. Cahen, "Douanes et Commerce dans les Ports Méditerranéens de l'Égypte Médiévale d'après le Minhādj d'al-Makhzūmī", JESHO, vol. VII, 1964, pp. 257-62.

⑦ al-Qalqashandī, Ṣubḥ, vol. III, pp. 455-56.

⑧ C. Cahen, op. cit., p. 260.

⑨ S. Labīb, Handelsgeschichte, SS. 164-65.

⑩ Ibid., SS. 190, 192, 331.

⑪ M. Sobernheim, op. cit., S. 83.

⑫ I. R. Lapidus, Muslim Cities, pp. 122, 127.

⑬ J. Wansbrough, "A Mamluk Ambassador to Venice in 913/1507", BSOAS, vol. 26, 1963, pp. 528-29.
M. Reinaud, op. cit., 25-27, 33-36, 39-41.
この条約集の訳者 Reinaud はこの dacchieri を特権商人の意味に解しているが、これは誤訳である。

⑭ J. Wansbrough, A Mamluk Letter of 877/1473, p. 206.

⑮ H. Ernst, Die mamlukischen Sultansurkunden des Sinai-Klosters, 1960, SS. 182, 184, 188.

⑯ S. Labīb, Handelsgeschichte, S. 391.
Ibn Taghrī Birdī, History of Egypt, part. V, 1960, pp. 138-39.

⑰ G. Ferrand, Les Poids, Mesures et Monnaies des Mers du Sud aux XVIe et XVIIe Siècles, JA, sér XI, t. XVI, 1920, pp. 19-23.

⑱ D. Ayalon, L'Esclavage du Mamelouk, 1951, p. 3.

⑲ S. Labīb, Handelsgeschichte, SS. 171-72.

⑳ D. Ayalon, L'Esclavage du Mamlouk, p. 4.

㉑ al-Sakhāwī, al-Ḍaw' al-Lāmi', vol. I, 1353-55 AH, p. 118.
I. R. Lapidus, Muslim Cities, p. 127.

㉒ S. Labīb, Handelsgeschichte, S. 404.

㉓ I. R. Lapidus, Muslim Cities, pp. 122-23, 127-29, 214-16.

㉔ al-Qalqashandī, Ṣubḥ, vol. VI, p. 13.

㉕ 十五世紀のチムール帝国において、マルシャ、キプチャック汗国方面で活躍した商人に Khoja Shams al-dīn Muḥammad という者がいる。W. Hinz, "Ein orientalisches Handelsunternehmen im 15 Jahrhundert", WO, 1949, SS. 313-40. さらにインド、南海方面でも商人にホジャのタイトルがつけられることがある。佐藤圭四郎「ポルトガル人来航前後における南海のイスラーム教徒」『オリエント』第八巻三・四号、一九六六年、六五、七頁。

㉖ al-Sakhāwī, al-Ḍaw', vol. V, pp. 87, 165.
Ibn Taghrī Birdī, History of Egypt, part. IV, pp. 59-61.

㉗ al-Sakhāwī, al-Ḍaw', vol. II, p. 43, vol. IV, p. 319.

㉘ M. Reinaud, op. cit., p. 38.
J. Wansbrough, A Mamluk Ambassador to Venice in 913/1507,

p. 526.

㉙ Ibn Ṭūlūn, Mufākahat al-Khillān fī Ḥawādith al-Zamān, vol. I, 1962, p. 132.

㉚ I. R. Lapidus, Muslim Cities, p. 214.

㉛ al-Sakhāwī, al-Ḍaw', vol. III, p. 126.

A. Darrag, Barsbay, p. 208.

㉜ Ibn Ṭūlūn, Mufākahat, vol. I, pp. 63, 71.

㉝ Ibn Taghrī Birdi, History of Egypt, part. V, pp. 103-04.

㉞ D. Ayalon, The System of Payment, p. 45.

L. A. Semenova, op. cit., p. 86.

㉟ E. Ashtor-Strauss, "The Kārimī Merchants", JRAS, 1956, p. 49.

J. Sublet, "'Abd al-Laṭīf al-Takrīti et la Famille des Banu Kuwayk, Marchands Kārimī", Arabica, IX, 1962, pp. 193-96.

㊱ E. Ashtor-Strauss, The Kārimī Merchants, p. 51.

㊲ S. Labib, Handelsgeschichte, S. 405.

おわりに

今まで、エジプトの商業活動の問題を考察してきたが、この時期のエジプトにおいては、バルスバーイの独占政策以後、商工業の発展が、きわめて不健全な状態にあったことを見てきた。すなわち、独占制の実施に伴なう対西欧関係の悪化、とりわけ、エジプトの市民層の健全な発展の阻止という現象を見てきたのである。最後に、当時の知識人たちはこの時代の社会・経済問題をどのような眼で見ていたかを、ごく簡単に示しておきたい。

この意味で、まず最初に取り上げなくてはならないのはイブン・ハルドゥーンであろう。彼はその著名な国家論を展開させている箇所で、国家と商業の関係についても論じている。彼はまず、王朝が末期に達すると、その増大する経費をまかなうために商税収入に依存するようになると述べている。[1] いわば、商税収入に依存する国家は末期的な状態にあるといえるのである。さらに、国家の商業活動は有害であるとし、支配者は人民の商業活動には干渉すべきではなく、税収入を通してのみ、彼らと接触すべきである。支配者が直接に商業活動に参加することは、人民の労働意欲を減退させ、人民にとっても、支配者自身にとっても有害な結果をもたらすと述べている。[2] つまり、国家の商業行為への直接の参加はきわめて憂うべき結果をもたらすとしているわけである。このイブン・ハルドゥーンの理論は十五世紀のマムルーク朝国家の歴史的現実の考察を通して得られたものではない。[3] しかしながら、このイブン・ハルドゥーンの死後約二十年後に実施されたバルスバーイの独占

政策を考察していくと、このイブン・ハルドゥーンの指摘はきわめて暗示的であり、バルスバーイの政策の核心にふれているといわざるをえない。その弟子で著名な歴史家である al-Maqrizi（一四四二年死）は十五世紀の初頭のエジプトの社会・経済状態を一四〇五年に著わされた著作の中で論じている。彼は自己の時代が危機の状態にあることをはっきりと感じており、主として貨幣制度の混乱にその徴候を感じ、当時のインフレーションとエジプトの諸階級の苦難について語っている。④

さらに、独占制の実施以後の一四五〇年頃のマムルーク朝社会を論じた al-Asadi の著作が近年、明らかにされた。彼は貨幣制度、度量衡の混乱について語り、インフレーションに言及しつつ、その背後にある独占制の問題を見落してはいない。いわば、イブン・ハルドゥーンが理論的に提示したものをアサディーは現実のものとして受けとめているわけである。そして、カーリミー商人時代のエジプト商業の英雄時代ははっきりと過去のものとなったことを感ぜざるをえなくなっている。⑤

要するに、十五世紀において、マムルーク朝国家がしだいにライトゥルギー国家への傾斜を強め、十六世紀の最後的なカタストロフを待つまでもなく、内部的にほぼ破産しつつあったことが看取されるわけである。

① 田村実造編『イブン・ハルドゥーンの歴史序説』上巻、一九六四年四六五―六六頁。

② 前掲書、四六六―六九頁。

③ イブン・ハルドゥーンは、一三八二年以後、エジプトに在住したが、十四世紀末より十五世紀初頭にかけて、エジプトは非常な経済危機の状態にあったにもかかわらず、彼はこの問題については意外にも殆んど沈黙している。
W. J. Fischel, Ibn Khaldūn in Egypt, 1967, pp. 78-80.

④ al-Maqrizi, Igātha al-Ummа bi-Kashf al-Ghumma, 1956, pp. 47 ff.

⑤ S. Labib, "Al-Asadi und sein Bericht über Verwaltungs-und Geldreform im 15 Jahrhundert", JESHO, vol. VIII, 1965, p. 314.

（京都大学大学院学生）

Tao-chü 道挙 and its Importance in the Official Appointment

by

Masumi Fujiyoshi

At the end of K'ai-yüan 開元 in the reign of Hsüan-tsung 玄宗, Tao-chü 道挙 which was established as a department of K'o-chü 科挙 was succeeded without a break till the end of the T'ang 唐 dynasty and exerted considerable influence.

This system was created, not through the Hsüan-tsung's partiality to Taoism, but through that policy since the establishment of the state in which the three religions, Taoism at the head, Confucianism, and Buddhism, though unified, were made to shoulder a part of the T'ang administration on the premise that Hsüan-hsüo 玄学 and Taoism had been greatly popular since Lu-ch'ao 六朝, and through the Tao-shih's 道士 intrigue to get over Buddhism as a medium of Lao-tzū 老子 who was set up as the founder of T'ang.

The process to the formation of Tao-chü against Ming-ching-K'o 明経科 in which Confucianism was made much of was equal to a great retreat of Confucianism and stimulated the Buddhist party which were going to overcome the Taoistic party, resulted in the priests, officialization. Besides, the structure of Shih-tai-fu's 士大夫 thinking in which they required Taoistic knowledge as well as Confucianism in public, mixed with the knowledge of Buddhism, grew more confused and had a strong tendency to identification by oneself.

The Commercial Policy of the Mamluk Dynasty

by

Seiichi Kobayashi

The purpose of this paper is to examine why the commercial activity of the Arabs in the medieval ages declined. Here an attempt was made to illustrate the commerce of Egypt in the period of the Mamluk Dynasty, which was the golden age of the Arab commercial activity. Through the investigation of the relations between the commercial

policies of the Mamluk Sultans and the Egyptian merchant class, I explained the monopolistic policies of commerce and industry in the 15 th century and its effects upon the merchant class.

Tachai

——the model of the socialistic village reconstruction——

by

Michihiro Kohno

Tachai productive brigade, a mountain village in the midst of Taihan mountain range in Shansi province, is called the model of socialistic village reconstruction in People's China, and, since 1964, the movement of "Learn from Tachin in industry, and learn from Tachai in agriculture" was spread all over the country. Above all, in the midst of the vigorous storm of proletarian cultural revolution, Tachi's reputation enhanced more and more, and now the movement to learn Tachai is spreading to the every corner of the country. Why Tachai is regarded as such a model.

Usually, Tachai has been held up as an exsample of how man, through self-reliance and determined hard work, can transform nature, and emerge from backwardness. The Tachai peasants have accomplished the seemingly impossible task of making their barrer, rocky hillsides into fertile terraces. At the same time Tachai is a model brigade who developped many high technical improvements in agriculture. But these are not so serious problem than the following. Who was the motive force for the upsurge of productive power?

In Tachai, the motive forces were the jointed poor peasants and the lower middle class peasants. The leaders of Tachai, who themselves were the sons of poor peasants, jointed with them, always worked with them, discussed with them, and learned from them to accomplish their hard enterprises. Such modern "Foolish Old Men who removed the mountains" have learned that the socialistic reconstruction means the struggle between the two lines, and, in fact, they fought with the reactionaries in the communist party as well as the former land lords, or the former rich farmers during the transformation movement for nature. Through the "Three Revolutional Momvement", that is the